

学位論文の調査要旨

専攻名 (又は推薦専攻名)	地域イノベーション学専攻	氏名	永林 隆
学位論文題目	城下町の伝統と持続可能なまちづくり ―彦根城下町の過去、現在、そして未来― (英訳: A study on the history of the Hikone castle town)		
調査委員会	委員長	矢野 竹男	
	委員	藤田 達生	
	委員	加賀谷 安章	
	委員 (外部委員)	山村 亜希	
調査結果の要旨			
<p>本論文は、彦根城およびその城下町を事例に、古文書および城下町研究の先行研究等を基に、織豊期から昭和初期の近現代にかけて、彦根城および城下町の形成と役割の変容に関してまとめ、彦根城およびその城下町の歴史文化遺産としての価値の検証を試みた城下町研究で、歴史文化遺産を活用することが、市街地再開発事業・コンパクトシティ化計画にどのように寄与するかというところまでを考察した論文である。</p> <p>序章では、研究の背景および目的・方法について述べるとともに、先行研究について記述している。そのなかで、城郭およびその城下町の形成期から現在に至る過程を通観的に捉えた歴史研究が見当たらないことを示すことにより、本研究の独自性・意義を明らかにしている。</p> <p>1章では、織豊期から江戸初期にかけて、軍事拠点として彦根城が建築され、軍事・政治都市として彦根城下町が整備・形成された経緯について述べている。</p> <p>2章では、江戸幕府成立後の統治体制の転換に伴い、彦根城および彦根城下町が、軍事拠点としての役割を維持しながらも文化都市に変容・発展した経緯について述べている。</p> <p>3章では、明治維新から昭和初期(近現代)の社会構造の転換に伴い、産業都市へと転換した経緯について述べている。</p> <p>終章において、1章から3章でまとめた各時代の歴史事象を織豊期から近現代までを連続的に通観することで、歴史文化遺産としての彦根城および城下町の価値の検証と市街地再開発事業における歴史的景観保全への活用の試みについて述べている。</p> <p>研究成果は、本論文提出者が彦根市職員として関与している、市街地再開発事業におけ</p>			

る歴史的景観保全への活用、鉄道駅を中核施設としたコンパクトシティ化計画への活用などのフィールドワークを行うことで、その有用性を検証することを試みており、地域イノベーション学の視点からも価値が高い研究と言える。

調査委員会から、論文について、章立て・構成・文章の流れなどは概ね整理されているが、本論文の中心課題である城下町の形成と変容の過程を通観的に明らかにするためには、もっと丁寧な論述を行う必要がある旨を指摘し、論文の提出期日までに改訂することを指示した。

外国語については、英文プロシーディングのある国際学会(IWRIS2020)での発表が行われており、三重大学大学院地域イノベーション学研究科博士後期課程学位審査内規に関する申合せ 第11条(2)に該当する。

関連論文等の発表状況

第1著者である邦文関連論文4報が既に査読のある学術雑誌に掲載されており、内1報の掲載年は2020(令和2)年である。加えて、英文プロシーディングのある国際学会(IWRIS2020)での発表も行われており、学位請求論文の提出のための要件を満たしている。

以上のことより、関連論文等の発表状況は良好であると判断した。

以上の研究成果は、特に地域イノベーション学研究科の研究として有意義であり、博士(学術)の学位を授与するにふさわしいので、「合格」と判定する。